

## 山田寺金堂・北回廊の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

山田寺第2次調査は、金堂・北回廊を対象に実施し、従来例をみない特異な平面形式の金堂遺構を検出するなど飛鳥時代寺院に関して多大な成果を納めたのでここに概要を報告する。

金堂基壇の遺存状態は良好で、東西21.6m(約65尺)、南北18.2m(約55尺)、高さ2mの壇正積基壇を検出した。基壇上面では礎石抜取穴12、地覆石抜取穴3を検出するとともに、創建時の位置を保った礎石2個を確認した。金堂建物の平面は、桁行3間(約9m)、梁行2間(約6m)の身舎の四面に、桁行3間(約15m)、梁行2間(約12m)の廂がつき、建物全体としても正面3間、側面2間となる特異な平面形式が明らかになった。このような建物平面は従来知られている身舎と廂の関係では解釈し難く、おそらく構造的には法隆寺金堂のような雲型肘木が使用され、肘木の配置は玉虫厨子にみられるように扇形に割付けられたものと推察される。柱間寸法は、基準尺を1尺33.3cmに復原すると遺構によく合致し、正面3間が15尺等間、側面2間が18尺等間となり、身舎についても中央間15尺、両脇間6尺、側面2間9尺等間となる。現存する2個の礎石は花崗岩を用い、一辺1mの方座の上に径0.9mの単弁の蓮華座をつくり、その上に径0.6mの円柱座を造り出している。地覆石も花崗岩で、幅0.3m前後、長さ1.3m、高さ0.25mの長方形の地覆座をもつ。地覆座の中央には壁内の間柱をうけるくりこみが認められる。地覆石の抜取穴は入側柱列には認められず、現存する2個の礎石にも地覆座がないことから、入側柱間は開放であったものと考えられる。礎石・地覆石は、基壇築成途上で据付け掘形を穿ち、根石を用いずに据えられている。

基壇の化粧石はほとんどが抜取られていたが、基壇西北部に地覆石と羽目石が残り、全体の旧状を窺うことができた。地覆石には長さ0.6~1m、幅0.3mの花崗岩を横長に用い、前面から0.25mのところ欠込みを施して羽目石との安定をはかっている。羽目石は凝灰岩で、地覆石前面から約0.1m内方に面を揃えている。羽目石の両端には縦框状の造出しが施され、東石を立てたかのような効果をみせている。

基壇各辺の中央には階段を設置しているが、西階段を除く3箇所では石が抜取られており、その痕跡を検出したに留まる。抜取り痕跡などから階段の規模を復原すると、南北両階段が建物の中央間に合せて幅5m(15尺)、東西両階段が幅4.45m(13尺)で、階段の

燈籠と礼拝石

山田寺第2次調査遺構配置図

出はいずれも1.6m(約5尺)となる。西階段には花崗岩の段石最下段と凝灰岩の北側耳石が残る。耳石の表面には動物の前肢とみられる浮彫りが残っている。これは白虎の一部とも推測されるものである。階段の構築にあたっては、基壇の一部を削除してから再度版築しなおしている。なお、金堂基壇の築成に際し、地盤の軟弱な部分にのみ掘込み地業を行なっている。

基壇周辺には、階段の出に合せた幅1.6mの犬走りがめぐる。犬走りには「榛原石」と呼ばれる扁平な板石を4列に敷きつめ、外周に縁石を立てる。この敷石面は焼けた痕跡が著しく、金堂も塔と同様に焼失したことを示していた。金堂南面の中央には礼拝石S X 011が犬走り縁石に接して設置されていた。東西2.4m、南北1.2m、厚さ0.2mの板石で、直角に面を取り、表面を丁寧に磨いている。石材は「亀山石」と通称される流紋岩質溶結凝灰岩である。礼拝石の南3mには燈籠S X 012が伽藍中軸線上に据えられている。単弁八弁の反花を造出した凝灰岩製の八角形台座と花崗岩の台石、それらを据えた玉石組の壇が残り、周囲から凝灰岩製の火

袋片も出土した。

金堂周辺は創建以降、2時期にわたって大規模な整備が行われている。その第1期は、旧地表面に若干の整地土を置いた後、瓦を敷設するもので、8世紀後半頃の整備と推定される。第2期は瓦敷の上にバラスを敷くもので、10世紀代に行われたものと考えられる。

北回廊S C080は、発掘前の推定どおり金堂・講堂間から検出され、山田寺の伽藍配置が「四天王寺式」とは異なることを確認した。8間分を検出し、東寄り5間分12箇所礎石抜取穴と据付け痕跡を、西寄り2間分5箇所礎石落し込み穴を検出した。回廊造営の基準尺は、金堂と異なり、1尺を30cmとみなした方が適切で、梁行12尺(3.6m)、桁行13尺(3.9m)に復原できる。落し込まれた礎石は、一辺0.7mの方座上に径0.6mの円柱座を造り出した花崗岩礎石である。北側の落し込み穴から発見した3個の礎石には地覆座がつくことから、回廊の北側柱列が仕切られて内庭側は開放になっていたことがわかる。基壇は上面と北側を削平されているが、南縁には花崗岩玉石の抜取穴が並び、乱石積の基壇であったことを示している。基壇幅は6.3m(21尺)に復原できる。基壇の南には幅0.45mの雨落溝S D081がある。

その他の遺構としては、金堂造営工事に伴う廃物の投棄坑S K045、瓦敷内に埋込まれた円筒土管S X015、11世紀代の土師器を出土したS K206、金堂焼失以降の土壌S K203・207、溝S D208～211・213・215・221～223、井戸S E218などがある。

出土遺物には大量の瓦埴類のほか、金属製品(飾金具・鋳・釘等)、建築部材(斗拱等)、土器類、埴仏などがある。瓦についてみると、単弁八弁蓮華文の所謂山田寺式軒丸瓦と四重弧文軒平瓦が主体である。山田寺式軒丸瓦は6種に細分されるが、瓦当面径が最大のA種が中心を占める。5種に分かれる榿先瓦でも面径が大きく彫の深いA種が過半を占める。

以上、今回の調査で山田寺金堂の規模とその特異な構造が明らかになるとともに、北回廊の検出によって四天王寺式とは異なる伽藍配置を確認することができた。また、金堂の創建年代を示す資料として金堂造営に伴う土坑S K405の出土土器(7世紀中頃)がある。これは『上宮聖徳法王帝説』の裏書にみる金堂創建年代(皇極2年・643)とよく合致しており、金堂の創建が皇極朝にあった可能性は強いといえよう。また、金堂の焼失時期は、焼失後間もない頃に開削された溝S D208～211等から出土した土器の年代からみて、遅くとも12世紀後半までに求められるだろう。(松村恵司)

北回廊